

星村平和先生を偲んで

— 退官記念誌『みち』をてがかりに —

社会系教科教育学会 第3代会長
兵庫教育大学名誉教授

中 村 哲

星村先生と私が密に接することになったのは、秋田大学に勤務していた昭和59年の秋ごろ、兵庫教育大学の創設から勤務されていた金子廉先生の後任人事で星村先生から連絡をいただいたことがきっかけでした。昭和60年4月に私が兵庫教育大学に赴任し、平成元年4月に星村先生が国立教育研究所に転勤された約五年間、一緒に兵庫教育大学にて勤務させていただきました。また、息子が附属幼稚園に入園した時に附属幼稚園の園長先生になられ、息子が卒園する際には卒園証書をいただいた次第です。さらに、先生は鹿児島県立大島高校を卒業されていたので、旧大島高校卒業の父とも同窓生との繋がりがあり、関西地区の安陵会に参加されていたとのこと。兵庫教育大学では鹿児島県人会に所属され、県人会の方々とも積極的に交流されていました。このような星村先生との交流を通して先生の生き方のポリシーは独立独歩ではなく、協立協歩であると察しました。先生は国立教育研究所を平成七年三月に退職される直前の二月に『退官記念誌みち 星村平和』の著書を刊行。この著書をてがかりに星村平和先生のご遺徳を偲びたいと思います。



本著は、平成七年二月に「教育情報出版」から発行され、書名は、『みち』。表紙カバーと表紙の色、デザイン、紙質等の装丁が、著書というよりも美術作品としての雰囲気を感じられます。また、見返し後に兵庫教育大学附属幼稚園長として幼児と手をつないで前進されている写真を掲載。まえがきは、一九九五年一月四日のご誕生日の執筆日。さらに、まえがきと奥付の著名が活字でなく、自筆。目次や各部の扉ページの装画。そして、奥付には、「装丁—星村隆史」「装画星村淳子」のご家族の方々の氏名が記載。このように本著は、星村先生ご自身の思いとご家族の協力によって刊行されたことが実感できます。特に、ご自身の写真ではなく、園児たちと手をつないで前進されている姿は、これから成長していく園児たちと供に先生も未来へ歩んでいくという強いメッセージが込められているように受け取れます。

この先生のメッセージは、書名を『みち』にされたきっかけとも関連します。そのきっかけは、永六輔の『大往生』において紹介されている犬山の寺の門前の次の掲示板の文章に共感されたとのこと。「子ども叱るな / 来た道だもの / 年寄り笑うな / 行く道だもの。 / 来た道 / 行く道 / 二人旅 / これから通る今日の道 / 通り直しのできぬ道」。このような道の繋がりと、これから行く未知なる道もあることに気づかれ、「退官後の人生に自らの可能性を託してみようという気になりました。どのような未知との遭遇があるか分かりません。しかし、未知なる可能性にも挑戦してみるのも、高齢化社会を生き抜く一つの知恵ではないかと思いいたりました。そこで書名を『みち』とした」とのことです。

内容は、「第一部 『まえがき』にみる時代相」「第二部各期にみる一思索」「第三部 略歴と教育研究」の三部構成。第一部は、「第一章 一九七〇年代の『まえがき』」「第二章 一九八〇年代の『まえがき』」「第三章 一九九〇年代の『まえがき』」の3章構成。これらの内容は、各年代に星村先生が編著として関与された著書の「まえがき」が掲載され、各時期の教育動向を背景に編著の意図や意義が述べられています。第一章では、「世界史 その内容と展開の研究（学事出版）」「文学作品を利用した世界史学習（学事

出版)」「歴史教材の精選とわかる授業(明治図書)」「月刊歴史教育一創刊のことば(東京法令)」「新しい歴史的分野の指導事例(明治図書)」「新しい歴史学習の構想(東京法令)」の「まえがき」。70年代では、高校の世界史や中学校の歴史的分野の歴史教育の編著が主になっています。

第二章では、「中学校社会科指導細案 公民的分野(明治図書)」「世界史の授業展開(学事出版)」「社会科のための文化人類学(東京法令)」「公民の教材研究(明治図書)」「歴史教科書を活用したわかる授業の創造(明治図書)」「中学校社会科課題学習の新展開(三晃書房)」「日本史教育に生きる感性と情緒(教育出版)」の「まえがき」。80年代では、歴史教育関係だけでなく、公民的分野や文化人類学にも関与されると共に、歴史教育における情緒領域への進展の編著となっています。

第三章では、「小学校歴史学習の理論と実践(東京書籍)」「新中学校社会科授業方略の理論と実践(清水書院)」「人間関係(保育出版社)」「教育課程の論争点(教育開発研究所)」「児童文化(保育出版社)」「社会科授業の創造と実践(現代教育社)」の「まえがき」。90年代では、小学校や中学校の社会科教育だけでなく保育内容の編著も含まれています。このように高校の世界史教育を核にしながらか中の社会科教育と保育領域にも幅広く関与された編著内容になっています。先生が担当された著書として、第三部で記載されていますように総数55冊が記載されています。これらの約半数の書籍において編者を担っています。さらに、各著書の執筆担当は、先生が勤務されていた広島県教育委員会、文部科学省、兵庫教育大学、国立教育研究所において繋がりを有する全国の教育関係者の方々になっています。その意味では、これらの編著は勤務されてこられた組織や立場における人脈ネットワークを活用されて刊行されたと言えます。

第二部は、「産業革命—広島県公立高校時代—」「ヨーロッパの最近の史想—広島県教育委員会時代—」「『世界史』における文化圏学習—文部省時代—」「戦後における歴史研究の変遷と歴史教育—兵庫教育大学時代—」「一九七〇年代の社会科教育にかかわって—国立教育研究所時代—」「『変化』の質的認識とそれへの対応力—国立教育研究所時代—」として、先生が勤務されていた職歴時代に執筆された論稿になっています。基本的には、歴史学と歴史教育、社会科教育の動向、新世紀への教育論に関する内容です。これらの論稿において先生の問題関心は、世界史研究の学的視点と社会的背景の視点を踏まえた教育論であると言えます。特に、「世界史」の「文化圏学習」と「現代社会」の新設を踏まえた学力観と指導力の指摘は、意義ある指摘となっています。このような論稿においても先生が「木村尚三郎」「祖父江孝男」「平田嘉三」等の有名な研究者の方々との交流もされていたことが読み取れます。

第三部では、「略歴と学会及び社会的活動」と「研究と教育」がまとめられている。特に、「研究と教育」では、「著書」「論文」「教育小論」「報告書」「事典等」「書評」「学習指導要領関係」「教科書」「中等教育資料」「教育技術中学教育」「シンポジウム」「座談会・対談」として約300の業績が紹介されています。これらの業績においても先生が務められた広島県教育委員会、文部省、兵庫教育大学、国立教育研究所にて築かれた人脈との繋がりが反映されています。

このように星村平和先生が退官記念誌として出版された『みち』の著書は、先生が歩んでこられた人生のみちで協立協歩をされた数多くの方々への感謝と指針も込められているように思います。先日、兵庫教育大学へ寄贈する長岡文雄先生所有の授業資料や著書を整理していたところ本著の『みち』を見つけました。天国にて星村先生と長岡先生の交流の姿を思い浮かべながら、いずれ私も先生方にお会いできることをお伝えしました。

合掌